

2017年7月16日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 使徒言行録 16：25～34

説教「あなたも家族も救われる」

日本キリスト教会鶴見教会 牧師 高松牧人

使徒言行録 16 章にはフィリピの教会ができる発端となる出来事が記されています。川岸の祈り場でパウロの話にじっと耳を傾けたリディアという女性とその家族が、最初に洗礼を受けます。しかしその後、占いの霊にとりつかれた女奴隷をパウロがイエス・キリストの名によって正気に立ち帰らせたところ、彼女の占いで金儲けをしていた人たちが営業妨害をされたとばかりに訴えたのでした。彼らはパウロたちのことを、町を混乱させている連中だと言って非難したのです。扇動された群衆は騒ぎだし、パウロとシラスは法的な根拠も正統な理由もなく、逮捕され、鞭打たれ、足枷をはめられて、牢に入れられたのです。

しかし、その牢獄の中では不思議な光景が展開していたのです。「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」。うめきでも叫びでもない、冷静でしっかりした讃美と祈りの声が牢の中に響いていたのです。他の囚人たちも、いつしかその声に聞き入るようになっていたというのです。牢獄の中に囚人たちを巻き込んだ礼拝堂が出現していたのです。

旧日本基督教会の植村正久牧師はこの箇所の説教で、この場面を「奇妙なる礼拝堂、奇妙なる聴衆、また奇妙なる伝道ぶりである」と描いていました。神は、私たちが讃美と祈りを捧げるところで、私たちを用い、私たちが思いつかないような不思議な御業をされるのです。

奇妙なる礼拝堂で、奇妙なる聴衆に、奇妙なる伝道がなされていたところで、思いがけない出来事が起こりました。「突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった」（26 節）のです。すると、「目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げってしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした」（27 節）のです。彼の行動はあまりに短絡的ですが、居眠りをしていて、大地震で目を覚まし、パニックになる中で、囚人たちがみな逃げ出してしまったと思いこんだのでした。囚人を逃がした番人はその囚人と同じ刑に処せられることになっていましたから、彼はもう自分が処刑されるものと思いこんだのでしょう。

ところが、そのとき彼は牢の奥からの声を聞きます、「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」（28 節）。その声に、看守は明かりをもって来させて、牢の中に飛び込み、パウロたちが逃げ隠れしていない事実を確認すると、二人の前に震えながらひれ伏し、二人を外に連れ出して、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」と尋ねました。彼はパウロたちの中に普通の囚人ではない、ただの人でもない、そこに神を信じて生きる人の揺るがぬ姿を見たのです。権力のもとに身をおいて仕事をしなが

ら、不安でいつも戦々恐々としている自分に比べ、この一見無力に見える男たちの、何と毅然として平安で自由なことか。それがこの問いになったのでした。

だから、ここで救われるとは、処罰をどうして免れることができるかとか、個人的な病気や悩みからどうしたら救われることができるかということではありません。彼の求めた救いとは、生きていく上での根源的な確かさと平安が与えられることです。私たちの本当の救いとは、生きる時も、死ぬ時も、健やかな時も病むときも、順境の日も逆境の時も、変わることはないお方、生と死の支配者であるお方とつながっており、このお方によって罪赦されており、新しい命を約束されていることなのです。

看守の問いに対するパウロとシラスの答えは極めて明瞭で簡潔でした。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(31 節)。救われるために必要なこととしてパウロたちが求めたのは、イエス・キリストを信じ、受け入れるという一事でした。そして、彼らは看守とその家の人たちに主の言葉を語り聞かせ、彼らは洗礼を受けるのです。「救われるためにはどうすべきでしょうか」—「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。昔も、今も、教会が世の人々から尋ねられる問いと答えるべき答えは、この言葉に尽きるといってよいでしょう。これ以外にどんなに気の利いた答えを用意しても、それは正しい答えではありません。教会とは、この問答を尋ね求め、聴き取り、繰り返し確認し合うところだと言ってよいでしょう。

「奇妙なる礼拝堂、奇妙なる聴衆、また奇妙なる伝道ぶり」でした。神さまのなさることは人の思いを越えていて不思議です。これら一連の出来事はもちろん聖霊による奇跡でした。

しかし、私たちがここで教えられることは、福音の宣教は、福音を担う私たちが、自信と余裕にあふれ、人々からの名誉や称賛をあびるような中で進められるものではないということです。むしろ、私たちが困難や苦難に遭遇し、それでもなお祈りと讃美をささげていく中で、神さまが応え、神さまが進めてくださるのです。私たちの弱さの中でこそ、神さまは恵みと力を現してくださるのです。

パウロは、晩年、愛弟子テモテに宛てた手紙の中で、こんなことを書いています。「この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません」(Ⅱテモテ 2:9)。何と自由でのびやかな確信でしょうか。神の言葉が語られ聞かれるところ、讃美や祈りを通して神さまが仰がれるところで、神さまは新しい救いの御業を進めてくださいます。私たちをまことの自由と平安へと解き放つ言葉、イエス・キリストの救いの約束を、喜びの日にも、悲しみの時にも、聴き取っていききたいものです。